悪魔憑き少年少女暴力団

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔憑き少年少女暴力団

【Ｎコード】
Ｎ６４９２Ｇ

【作者名】
永良隆樹

【あらすじ】
僕は、秘密の場所で昼寝してて、変な世界へ行っちゃった。超ぢゃあくでクソ生意気なクソガキがいた。それから超超ぢゃあくでハードボイルドなおっさんがいた。僕はそのおっさんに召喚されたのだった。

ちょっとした資料ぽい事柄

この頁は、とばしていただいてかまいません。

［それぞれの悪魔のモデル］

ウラゥズモデル

φ（・・　）フラウロス。Ｆｌａｕｒｏｓ。ソロモン七十二霊。
召喚すると豹の姿で現われ、未来の知識を与える。が、偽りの霊とも呼ばれ、召喚円の三角形の中以外で語ることは、すべて偽りである。また、その逆とも言われている。
魔術師の敵を焔で焼き尽くす。

フルフルモデル

φ（・・　）フルフル。Ｆｕｒｆｕｒ。ソロモン七十二霊。
召喚すると有翼の鹿の姿で現われる。夫婦に愛をもたらすと言われる。秘密を暴露する。
召喚者の命に従い、稲妻を起こす。

マムフスモデル

φ（・・　）ハルファス。ときにハルパス。Ｈａｌｐａｓ。ソロモン七十二霊。
黒い鳩の姿で現われる。

戦争を起こし、剣で罰をもたらす。「パルパスは弾薬と武器に満ちた町をつくる」（レギナルド・スコット）
コウノトリの姿とも言われる。

［開門の印と閉門の印］

キシュの印（開門）
親指と中指を立てる。他は折る。障壁を破り、次元の門を開く。

コスの印（閉門）
親指は折る。他は立てる。次元の門を閉じ、経路を守る。

［呪文文言］

開門呪文「アイヌグゥム、レグィ（悪魔の名）」
閉門呪文「アイヒズロー、（悪魔の名）」
単体呪（シングルチャーム）「クルルゥス」
全体呪（ホールチャーム）「ギガクルゥラス」

安易で許せない始まり（前書き）

種別：異世界ファンタジー。いきあたりばったり、悪がき連冒険記。
掲載：のんびり、いいかげん不定期。申し訳ありません。

安易で許せない始まり

僕はお気に入りの場所にたどり着くと、乗ってきた自転車を転がして、ベンチに寝そべった。

ここは、学校から五キロほど離れた山のなか。林道っぽい小道をずっと進むと、大きな池がある。その池のほとりの小さな公園。

公園と言っても、遊具なんかない。ベンチがあるだけ。誰もいない。桜がたくさん咲いている。土日なら、花見客も来るけれど、穴場っぽい場所。

ここは僕のお気に入りの場所。いやなことがあったりして、一人になりたいとき、ここに来る。なにしろ今日もいやなことがあった。すこぶるつきのいやなこと。

マシタとふざけて暴れていて、手に持っていた傘がノミヤマのスカートをまくってしまった。ノミヤマの馬鹿垂れが僕がスカートめくりをしたとオバ金に言いつけたから、オバ金にたっぷり怒られた。オバ金はジェンダーだから、目を三角にして僕の弁明なんか聞かなかった。あんな大人が、真実を見落とすに違いない。本当のことがなにかなんてどうでもよくて、きっと自分の気に入らないことをまくしたててたいだけなんだ。

小六にもなってスカートめくりなんかするわけない。それに、どうせ見るんなら、ノミヤマなんかじゃなくて、もっと大人のお姉さんがいいに決まってる。それに、後ろからじゃなくて、前のほうがいいに決まってる。

ベンチに寝転がった僕の顔のうえに、桜の花びらがふってきている。僕は目を閉じて、いつもの楽しい空想の世界に遊びに行った。

豪華な船旅。突然の嵐。海に投げ出された僕。救助ボート。差し伸べられた手は、きれいなお姉さん。漂流。たどり着いた無人島。生き残ったのは僕とお姉さんのふたり。がんばって食料を集めちゃう僕。感激するお姉さん。バナナの葉っぱで家を作る。そして夜。

でもそこで空想はあやふやになる。なにしろ、脳内の画像データにないものが登場しちゃうんだから、しかたがない。

となりの馬鹿高校生はパソコンで海外のサイトを見ているらしい。僕に自慢してた。なんでもその動画サイトの利用者の七割は日本人で、アップされている動画もほとんどメイドインジャパンだって。恥ずかしい国だよなぁ。まあ、僕もその国の住民で、資格充分にエロいと思うけど。

ふたたび空想のなかへ引き返し、無人島で、水着姿のお姉さんと遊んでいるうちに、僕は眠ってしまった。

肌寒くて目が覚めた。

あれれ、と思った。ベンチのうえに寝ていたはずなのに、池のそばだったはずなのに、そこは、林のなかにぽっかり開けた草むらのなかだった。

ちくちくする背の低い草むらから、からだを起こした。周りを見回したけど、見慣れたものはなにひとつない。どう見ても、林と草と花しか見えない。立ちあがり、乗ってきた自転車を探してみたけれど、どこにもなかった。

「あれれぇ??」

僕は口に出して言ってみた。けれど、なにもわからないことには変わりなかった。誰か出てきて、どうしたの？　と聞いてくれるようなこともなかった。誰もいなかった。

僕はちょっとパニックになった。こんなときどうするンだっけ？？　必死で考えたけど、こんなとき、ってのが、見当らなかった。これって、どんなとき、なんだ??　普通、山で遭難したときは動いちゃいけないって言うけれど、ここで待っててても誰も助けに来てくれそうにない気がした。そこで僕は、自力で山をくだることにした。

林の中に小道があった。そこを歩きながら思った。

寝ている間に異世界に行っちゃうなんて安易な漫画やネット小説がよくあるけど、いくらなんでもそんなことは起こらないだろう、

と。なにが許せないと言って、安易なところが許せないじゃないか。が、林が途切れ、眼下の町が一望できる場所に出たとき、僕はいよいよもってぶっ魂消てしまった。

そこはいくら山のなかと言っても、学校から五キロの場所。そこには見慣れた僕の住んでいる町が広がっているはずで、大きな道路に車が行き交っているはずだった。が、けれど、そこに広がっていたのは、お堀に囲まれたヘンテコな町だった。春の空気のなかで若干かすんで見えるその町は、茶色や灰色の建物がごちゃごちゃに入り混じって並んでいた。そこには見慣れた、いわゆるビルディングという奴は全然なかったし、日本風の家屋もまったくなかった。そこに並んでいる建物は、中近東や地中海沿岸や中世のヨーロッパにありそうな建物ばかりだった。それが、ごちゃごちゃに並んでいた。

「ねぇねぇ。ここはどこだか教えてもらえますか？」僕はこの世界にいるかも知れないはずのなにかに聞いてみた。けれど妖精が出てきて教えてくれることもなかった。

とにかく、町がある以上、そこには人が住んでいるはずで、僕はその町へ行ってみることにした。とはいえ、ものすごく怖かったけれど。どんな人間が住んでいるかわからないじゃないか。人間じゃないかもしれないし。

冷血とおろおろ

山を降りると、そこは菜の花畑だった。女の子がふたりいた。僕と同じか、年下。ひとりは長い髪でティーシャツにジーンズ。もうひとりは、ショートカットでワンピース。ワンピースの子のワンピースはただの水色のワンピースだったけれど、ティーシャツの子のティーシャツは、普通のティーシャツだけどそのプリント柄が異質だった。ポップな感じもするけれど、奇妙な、見たことない意匠の文字がプリントされていた。

ふたりの女の子は、じっとこっちを見ている。僕も、黙って見た。長い髪の子は、とんがった目をしていた。色白で冷血な感じ。くちびるは薄くて、やっぱり冷血な感じ。とんがった目でこっちを訝しげににらんでいた。もうひとりの子は、目が大きくてかわいい顔の子だった。どこかちょっと夢見がちな感じの瞳と、ちっちゃなちょこんとした鼻。こっちの子も色白だけど、ほっぺがほんのり赤い。大きな目をうるうるさせて、こっちを見ていた。なんだか、びっくりしておどおどしているみたいだった。

とんがった目の子が言った。

「あんた、どこかの町の暴力団？」

「はぁ？？」

いったい僕のどこが暴力団に見えるんだろうか？　僕は呆気にとられた。すると女の子は言った。

「違うの？　じゃあ、ちびっ子団？」

「はあ？？」

なんなんだろう、この会話は。暴力団でなければちびっ子団？わけがわからないじゃないか。

「あんたの歳でちびっ子団なわけ？」

冷血はちょっと笑った。それは笑顔ではなくて、哂い顔だった。完全に僕を見下していた。僕は若干頭にきた。

「ち、ちびっ子団ってなんなんだよ？　わけがわかんないよ」
冷血は不思議そうな顔をした。訝しげな目に戻った。
「ちびっ子団はちびっ子団じゃない。みんな入るでしょ？」
多少心当たりがあった。
「そ、そりゃあ、昔マシタとやってたけど……」
でも、そのことを言われているのではない気がした。
「昔？　じゃあ、今は何団なの？」
「な、何団？？」
「正直に言わないと、命がないわよ」
「へっ？？」
ぎょっとした。まじなのかっ、ともちろん思った。でもなんだか、この女ならまじでやりそうだとも思った。なんで、団に入ってないと殺されるんだ、と混乱した。
「ちょっと、ちょっと待ってくれ。ここはどこなんだ？？　実は迷っちゃって、ここがどこだか全然わかんないんだ」異世界から来たんだ、とか言わなかった。間違いなく頭がおかしいと思われると思った。間違いなくここは異世界だ、とも思っていたけれど。
冷血はじろっとにらんだ。とんがった目がさらにとんがった。
「本当？　うそだったら召喚しちゃうわよ」
召喚ってなんだ、と思ったけど必死で言った。
「本当だってば。ほんとに迷ったんだ」
「ふーん。……攻撃に来た遠くの町の暴力団員かと思ったけど、うそじゃないみたいね。じゃあ、教えてあげる……」
冷血はわけのわからないことを言いながら、哂って教えてくれた。
「ここはンハよ」
ちっともわからなかった。
「ンハってどこなんだ」
「ンハは、ヌハンナよ」
「ヌハンナって？」
「ヌハンナは、シホクじゃないの」

「はあ??　シホク??」
「呆れた。自分の住んでる国の名前もわからないの??　ここはニホンじゃないっ」
ぜったい違う、と思った。
冷血は肩をすくめると、
「もう日が暮れちゃうわ。あんたみたいのにつき合ってられないから帰るわね。ナコ、帰ろう」となりの女の子に声をかけ、呆気にとられてる僕を残し立ち去ってしまった。

しばらく僕は、日暮れの菜の花畑のなかで、狐につままれた気分で立ちつくしていた。
気がつくとそばに変な生き物がいた。花のなかに座り、ふんぞり返ってこっちを見ていた。それはどうやら兎らしかった。でも、兎にしてはずいぶんと大きかった。土佐犬くらい。上半身が毛ではなくうろこだった。首の周りにたてがみがあった。顔は不気味だった。耳が長いからかろうじて兎とわかった。そのぎろっとした不気味な目をゆがませて、哂っていた。裂けた口から牙がたくさんのぞいていた。
身の危険と同時に、またしても見下されていることを感じた僕は、腹立たしい思いをしながらも、ゆっくりとあとずさった。どうして人間以外のものにまで、見下されるんだ、とむかついたけれど、文句を言って食べられるよりはと、そこから逃げることにした。走ったら追いかけてくるかも、と思ったけど、追いかけてくる気配はなかった。それでも走るのをやめる気にはならなかった。やがてお堀につきあたった。
僕はお堀の周りをぐるっとまわってみた。お堀の向こうに城壁がある。城壁の向こう側が、さっき山のうえから見た町に違いなかった。橋を見つけた。
それは跳ね橋みたいだった。多分、夜になったら、閉ざされるんだと思った。橋の向こうの門は開いていた。僕は橋を渡った。

門のところにおじさんがひとりいた。城壁にもたれて、煙草を咥えていた。歳は四十歳くらいで、着古した黒っぽいスーツを着て、ゆるくネクタイをしめていた。僕を見るとにやりと哂った。ずいぶん邪悪な感じだった。口を開くとダンディな口調で言った。

「よく来たな。ボウズ。貴様を呼んだのはこの俺だ」

「え??」

「この俺様が、貴様をこの世界に召喚したんだ」

邪悪な笑みを浮かべたおっさん

「帰してください」
理由も方法もどっちも全然わからなかったけれど、言う台詞は決まっていた。召喚したんなら、帰すこともできると思った。が、おっさんは邪悪な笑みを浮かべ、あいまいにごまかそうとした。
「まぁまぁ。そう言うな。いいところだぞ。きっと気に入る」
ぜったいそうは思えなかった。
「いやです。帰してください」
「なぜこっちに来たのかとか、ここがどこかとか、全然知りたくないのか？」
そりゃあ、知りたいけれど、帰ってしまったらきっと全然知らなくてもいいことだと思った。
「知りたくないです。どうでもいいです」
「そうか。じゃあ、教えてやろう」
人の話を聞かないおっさんだった。
「だが、もう、日暮れだ。腹が減っただろう？　来い。飯を食わせてやる」
変態かもしれない、と思った。僕は、カワノみたいに女子に人気はないけれど、二枚目であることには自信があった。美少年かもしれなった。
「ぜったい行きません。帰してください」
おっさんは肩をすくめた。
そのとき、おっさんの背後にメイド姿のきれいなお姉さんが現われた。それは、僕の空想のお姉さんにそっくりで、十七歳くらい、ウェーヴのかかった栗色の髪に、優しそうな瞳で、優しそうな笑顔をしていた。
「こちらにいらしたんですか、組長。お食事の支度ができましたよ」と、おっさんに言った。

僕は目が点になった。そのおっさんが組長で、多分冷血の言っていた暴力団組長だろうということがわかった、ことはどうでもよかった。その美人のお姉さんが、このおっさんのメイドさんらしいことがびっくりだった。

おっさんはお姉さんに答えた。

「おぅ。わりぃな。すぐに帰る。先に帰っといてくれ」

お姉さんは、ペコンと頭をさげて、すたすたと行ってしまった。おっさんは僕に向き直ると説得を再開した。

「もう、メシができたってよ。どうする？　が、行きたくねぇってもんを引きずっていくわけにもいかねぇし。どうだ？　考え直せ」

僕はおっさんが口を開く前に、考え直していた。黙ってうなずいた。

おっさんと並んで歩きながら、僕はあらためてその街並みを見た。大きな路は白っぽい石畳で、細い路は白い固い土みたいだった。建物は、住居らしきものは茶色い土壁と白い土壁のものがあり、大きな建物は石造りのものや、レンガ造りだった。大きなものでも、三階建てか、四階建てくらい。あまり高い建物はなかった。

歩きながら、おっさんは話した。

「ここがどこか教える前に、お前がどこにいたのか教えてやろう」

邪悪な笑みを浮かべながら、愉快そうに言った。

「お前がいた世界は、科学文明型物質世界十八番、だ」

僕がわけがわからないといった顔をすると、おっさんはさらに愉快そうに哂って言った。

「で、ここは次元魔法型物質世界七十四番、だ」

名称、というものに、何の意味もないことを知った。名前を聞いても、なんのことやらさっぱりだった。

「この宇宙は無数のパラレルワールドが重なりあって存在している。お前の世界で科学や化学が発達しているように、ここでは魔法、特に次元に関するものが発達している。この世界の人間は、他のさまざまな次元のことを知っている。さらに次元の門を開き、異世界の

ものを利用することもできる。例えばだ。この世界に発電所はない。が、お前らの世界からこっそり電力をもらって使っている」
　なんて邪悪なんだ、と思った。他の世界の電力までまかなってやってたら、CO2なんてぜったい減らないじゃないか、と憤慨した。
「が、車は要らない。空気が汚れちまうからな」
　なんて自分勝手なんだ、とさらに憤慨した。
「で、だ。お前をわざわざ召喚した理由は他でもない。実は俺は悪魔使いだ。だった、というべきかもしれん。三体の悪魔を使役していたんだが、使えなくなっちまった。つまり、後継者に継承すべきときが来たってわけだ。で、ひとつは俺の弟子が継承できた。もうひとつは、遠くの町の子供が継承できた。今は引き取ってこの町で暮らしている。で、最後のひとつはいくら探しても継承者が見つからなかった。霊視で探ってみたら、なんと別世界のお前だったわけだ」
　なんて迷惑な話なんだっ、と思った。
「と言うわけだ。俺の名は、龍（リュウ）・チャン。この町の暴力団組長だ」
　おっさんの名前なんかどうでもいい、と思った。それに、暴力団のことをなんだか町の正義の味方みたいに言ったことも、気に食わなかった。
「で。お前の名前は？」
　人のこと、名前も知らないで召喚しやがったのか、とは当然思った。むかついて黙っていると、
「まあ、名前なんかどうでもいいが……」と言った。
　なんだか、便宜上勝手に名前を与える気に思えた。思ったとおりだった。
「名前がないのも不便だから、俺がつけてやろう」
「真人（マコト）です」
　変な名前をつけられるのもごめんだから、答えた。すると邪悪なおっさんリュウ・チャンは、
「なんだ。ずいぶんえらそうな名前だな」と言った。マコトのどこ

がえらそうなのか、わからなかった。
歩いているうちに日が暮れた。小さな広場に着いた。レンガ造りの建物にぐるりと囲まれた広場で、真ん中に小さな噴水があった。噴水はライトアップされ、公園はイルミネーションで飾られていた。それはきっと僕の世界の電力に違いなかった。泥棒しているんだから、もっと節約してくれ、と思った。イルミネーションみたいな無駄なものに使わないでくれ、と。
おっさんは、広場に面したひとつの建物の前でとまった。
「ここが、この町の暴力団事務所だ。今日からお前の住むところだ」
まっぴらごめんだった。どうしてもうそういう風に話しが決まっちゃったんだ、と内心憤慨した。
建物はかなり大きくて、屋上に物見やぐらみたいなのがあり、扉のうえに大きな看板がかかっていた。看板には、あの冷血の着ていたティーシャツにあった、奇怪な図案みたいな文字が書かれていた。多分、この世界の文字。
「なんて書いてあるんですか？」
そう聞くと、おっさんはにやっと哂って答えた。
「悪魔団だ」
なんてやなところなんだ、と思った。

悪魔団本部

僕は、そのヘンテコな町ンハの暴力団、悪魔団事務所の扉をくぐった。

入ってすぐは、事務所だった。机があり、本棚があり本がたくさん並んでいて、壁に邪悪な感じのおどろおどろしい祭壇があった。でもそれは、僕らの世界でいう神棚かもしれなかった。部屋の隅に、ついたてがあり、ついたての絵は、さっき僕が見たお化け兎がやけに勇ましい感じで描かれていた。ついたての奥に小さな応接セットがあり、来客はそこへ通すようだった。

邪悪な面構えのダンディな暴力団組長リュウは、邪悪な笑みを浮かべながら、奥の部屋へ僕を招じ入れた。

そこは食堂だった。暖炉があって、大きなテーブルセットがあった。無数のろうそくが宙に浮いていたりしなかった。シャンデリア風の照明器具が、おそらく僕らの世界から盗まれた電力で煌々とともっていた。テーブルの上にはきれいにお皿とフォークが並び、夕食の用意がととのっていた。

反対側の扉が開き、さっきのお姉さんが登場した。僕たちを見て言った。

「お帰りなさいませ。組長。すぐにおふたりを呼んできますね」そして背中を向けすたすたと出て行った。

リュウが哂いながら言った。

「うちの組員が来る。仲良くしろよ」

冗談じゃなかった。暴力団員と仲良くなんてできるわけないじゃないか、と思った。が、入ってきたふたりを見て、目が点になった。予想していた人相あくどいむさい男二人ではなかったけれど、うちひとりとは、どうあっても仲良くできないと思った。さっきの冷血とおろおろのふたり組みだった。

冷血は僕に気づいたけれど、別段驚く様子もなく、ふん、と哂っ

た。おろおろの方は、おろおろした様子でペコンと頭をさげた。僕もつられて頭をさげたけど、となりのおっさんに向き直り、猛然と疑問を投げかけた。
「こっ、子供ぢゃないかっ」
「そうだ」平然とリュウは答えた。にやっと哂ってつけ加えた。
「だが、俺の悪魔を継承している。そこら辺の暴力団員なんか、束になっても敵わねぇ」
「こっ、子供が暴力団員になっていいわけないぢゃないかっ」
「ふっ。まあ、普通ならちびっ子団なんだがな」
「ち、ちびっ子団??」
　まただ。そのちびっ子団というのは、ひょっとして暴力団と並ぶ組織、あるいは下部組織のようなものなのかもしれない。
「お前、暴力団をなんだと思ってる?」
　暴力団組長からそんな質問をされて正直には答えられない。
「ちびっ子の集まりがちびっ子団。暴力をふるう人間、あるいは、暴力を背景に交渉ごとや仕事をする人間の集団が暴力団」
　一瞬期待したけど、どう考えても、僕らの世界の暴力団と同じだった。
「自警団とともにこの町を守ることもするが、自警団は防衛専門の組織。他の町へ攻撃をしかけたり、停戦の話し合いをしに行ったりしない。それは暴力団の仕事だ」
　若干、意味合いが違うように思えた。
「抗争、和平交渉、専守防衛、潜入テロ、暗殺、偵察、内偵、特殊工作、それらが暴力団の仕事だ」
　やっぱりどう考えてもやばいことばかりみたいだった。
「強盗組織なら強盗団とかギャング団、武器や禁止薬物の密売組織なら密売団、」
「え??　それって暴力団の仕事とは違うの??」
「当たり前じゃないか。なんで暴力団が犯罪をしなきゃならん」
　犯罪組織のことではないのか、とびっくりした。けれど、さっき

言った事のなかには、テロだの、暗殺だの、あった。
「青年の集まりは青年団、奥様連中は奥様団、実業家の集まりは実業団、花屋の集まり花団、酒屋団、パン団、老人団、赤ちゃん団、ネット小説家の集い、売れない団、それらの団を取りまとめる団団、いろいろ徒党はあるが、なかでも暴力団は町のみんなのあこがれの的だ」
「へっ？？　そうなの？？」
「当たり前だ。なにしろこの町を守る正義の味方だからな」
どうやらこっちの世界の暴力団は、なんだか恰好いい奴みたいだった。
「それって、騎士団とか、ひょっとしてそんな感じなの？」
「ふっ」リュウは鼻で哂った。
「そいつはお前の世界の中世にいた奴だろう。騎士とか、サムライとか、暴力をふるうことを生業とする人間がそんな恰好いい名前をつけるなんて許せんな。やってることは俺たちと変わらねぇ。さらにだ。俺たちは政治にはかかわらねぇ。そんな汚れた世界には関心ねぇからな」
なんだか、ダンディな哲学を感じた。でも、やっぱり、テロだの暗殺だの、人殺しは人殺しだと思った。
「そんなダンディでハードボイルドなこの町の暴力団に、今日からお前も仲間入りだ。喜べ」
「はあっ！？」
それは、うっすらわかっていた。話の流れから言って、そうじゃないとおかしいはずだった。だけど考えたくもなければ、思い至るのもいやなことだった。当然、はっきり言葉に出されたら、断固として断ろうと思っていた事柄だった。
「いやですっ！！」
リュウは哂った。哂いながら、何か考えているようだった。きっと邪悪な中年の知恵をめぐらせて、なだめすかしにかかるに違いないと思った。案の定、こう言った。

「まあまあ。そう言うな。せっかく来たんだからちょっとくらい遊んでいけ」
来たんじゃなくて、あんたが召喚したんだろおっ、と当然思った。人殺しを遊びと呼ぶ感覚も理解できないし、だいいち暴力団なんかに入ったら、親が自殺してしまう。
「人殺しなんかっ、ぜったいいやですっ」
それを聞いたリュウは、ちょっと申し訳なさそうな顔になった。ちょっと意外だった。そんな顔をすることが。でも、そんな顔をしたって、人殺しなんかぜったいするもんかっ、と思った。リュウは言った。
「そうか……。お前はこのことも分かってなかったんだな。まあ、当然かも知れんが……。もちろん、人間の町と抗争になることもある。攻撃を仕掛けられることも。でも、そいつはめったにない」
人間の町……人間じゃないのがいるの??
「この世界は次元の門があちこちで開いている。だから、色んな世界の奴がやってくる。凶暴な奴等も。獣人とか、魚人とか、吸血鬼とか、ゾンビとか……」
僕は涙ぐみ、ますますもって冗談ぢゃないっ、と思った。

マイラ（冷血）と、ナコ（おろおろ）と、みぃこさん（おねえさん）

まああったくもって、冗談ぢゃなかった。人殺しはいやだとか、そんな余裕な話しじゃなかった。きっと僕のほうが殺されるに決まっていた。どうして見ず知らずの町のために僕が殺されなきゃいけないんだ、と腹が立った。僕がこんなどことも知れない変な世界で死んでしまったら、きっとパパとママは悲しむと思った。でも、のんびり映画を観にいきそうな気もした。きっと羽を伸ばすに違いないと感じた。だけどそんなことよりも、年下（多分）の子ふたりの前だから我慢しているけれど、僕は泣いてしまいそうだった。

「ぜったいいやですっ。今すぐ帰してくださいっ」僕は目に涙をためて、ほっぺたをふくらましてリュウをにらみつけた。

リュウは、なだめるように言った。でも、にやにや哂っていた。

「まあまあ。そう言うな。これをやろう。悪魔団ロゴ入り革ジャンだ。特注だぞ」

背中に、あの看板の字と髑髏マークが描かれた革ジャンを持ってきた。ちょっと格好よかった。

「それはお土産にもらっていきますっ。帰してくださいっ」

僕が革ジャンを受け取ると、リュウはテーブルに座っているふたりに言った。

「今日から仲間になったマコトだ」

まったくもって、人の話を無視するおっさんだった。おろおろがペコンと頭をさげて、冷血が興味なさそうな目を向けて、名前を聞き返した。

「マコゥト??」

「マコトだ」リュウが言うと、ふん、と鼻で哂った。冷凍庫で三年冷やした氷みたいに、冷たい哂い方だった。

「ずいぶん、生意気な名前じゃない……」

マコトのどこが生意気なのか、全然わからなかった。でもきっと、

悪魔を継承したふたりのうち、おっさんの弟子というのは、このクソ女に違いないと思った。ぢゃあくな哂い顔が、そっくりだった。
「悪魔団団員、マイラと、ナコ、だ。仲良くしろよ」僕に紹介した。
名前なんて知りたくもなかったし、仲良くする気もなかった。
「仲間になんかなりません。早く帰してください」
僕が言うと、リュウは肩をすくめた。まったく無視して、こう言った。
「お前の席は、みぃこちゃんのとなりだ」
見ると、あのメイドさんがにこにこして座っていて、となりの席が空いていた。
僕はおとなしく言われたとおりの席に座った。
「よろしくね。マコト君。わたし、みぃこよ」
優しい笑顔で言われて、僕は、よろしくおねがいします、と頭をさげた。とりあえず、夕食を食べてから帰してもらおう、と思った。
料理はスープとパンと肉料理だった。スープは変わった味だったけれど、美味しかった。肉料理はステーキで、柔らかくて美味しかったけれど、何の肉かわからなかった。食べたことのない味だった。
「やっぱりウシガエルは美味しいわね……」冷血（マイラという名前）が、ぼそっと言った。
「かっ、蛙っ??　蛙なのっ??」僕が悲鳴のように聞くと、じろっとにらんだ。
「他に何があるのよ?」と言った。
「他に何もないのっ??」泣きそうな顔で僕が言うと、またしても哂った。
その肉は骨付きじゃなかったし、もちろんテバサキ風でもなかった。見た目サーロインステーキだった。ウシガエルの大きさがしのばれた。ぜったい、僕の世界の牛蛙とはまったく別の生物に違いなかった。
「豚とか鶏とかないの??」と聞くと、
「あるわよ。ブタガエル」と答えた。どっちにしてもいやだと思っ

た。
食事が終わると、リュウは煙草をふかしながら言った。分煙という感覚はないみたいだった。
「とりあえずだ。団のいろいろなことは、マイラから聞け。もちろん俺も教えてやるが。みぃこちゃんにいろいろ世話してもらうから、こっちの生活でわからんことはみぃこちゃんに聞け」
僕は素直にみぃこちゃんに頭をさげて、
「よろしくおねがいします」と言った。
みぃこちゃんは、にっこり笑って、
「何でも聞いてね」と言った。
「悪魔の召喚法なんかは明日詳しく教えてやる。今日はもう寝ろ。お前の部屋にちょっとしたプレゼントがある。寂しくないように、お前の世界からテレビを持ってきてやった」
そう言えばこの部屋にもないし、他の部屋にもテレビはなかった。
「こっちの世界にはテレビがないんですか？」
「ない」きっぱりとリュウは答えた。
僕はリュウの無知を教えてやった。
「放送局がなければテレビが映るわけありません」
リュウは哂って言った。
「馬鹿にするな。そのくらい知っている。ちゃんとＤＶＤと、ＤＶＤソフトを持ってきてやっている。よくわからんから、子供向けのヒーローものを適当に拾ってきた。部屋に置いてあるから好きなのを見るといい」

ぢゃあくな黒い箱

僕の部屋は三階だった。みぃこさんが案内してくれた。

となりはマイラとナコの部屋で、ふたり部屋らしかった。ふたりで部屋のなかに入って行った。ナコ（おろおろ）はペコンと頭をさげて、小さな声でおやすみなさいと言ったけれど、マイラ（冷血）のほうはまったく僕を無視して、さっさと部屋へ入って行った。

「では、ゆっくり休んでくださいね」みぃこさんは、扉の前まで僕を案内すると、そう言って戻って行った。

僕は部屋へ入ってみた。中はちょっと小さいけど、充分すぎる自由な空間だった。ずっとこんな自分の部屋が欲しかった僕は、ちょっと跳ねたりしてみた。ベッドがあり、机と本棚があり、テレビがあった。

僕はさっそくテレビの前に置いてあったＤＶＤのケースを手にとってみた。真っ黒いそれはなんだかとっても不審だった。

「ぶふっ！！」

僕は慌てて鼻を押さえた。血が出る、と思った。あのおっさんはほとんど日本語が読めないに違いない。真っ黒いＤＶＤケースに白い字で書かれたそれは、『性獣戦隊・ケダモノ、ジャー』とか、『巨乳ザウルスｖｓモミモミマン』とか、そんなのばかりだった。最高は、『未来から来た青い奴。もてないダメサラリーマンのび朗が、二十三世紀のエッチな大人のおもちゃでモテモテに』という長いサブタイトルのついた、『どらエロもん』と、その続編『どえりゃあエロひもん』だった。全部で六本。黒いＤＶＤシリーズ。僕はあのおっさんの無知を歓迎した。

今夜、僕が目にするものは、きっと僕の人生を変えるに違いなかった。

わくわくどきどきしながら、さっそく『どらエロもん』をセットして、ずっと正座してテレビの前で待ってみたけれど、いつまで経

っても画面になにも映らなかった。電源は入っている。でも、なにも映らない。まさかと思って、裏をのぞいたらまさかだった。僕はあのおっさんの無知を涙目で恨んだ。配線がまったくされていなかった。どうしてこんなことも知らないんだっ。

まったくあきらめ切れなかった。特に『どらエロもん』は見てみたかった。きっと、ずんぐりむっくりのくせに、邪悪な笑みを浮かべて、ポケットから女性にお見せできないような形のものを取り出すに違いなかった。

僕は銀色のディスクをにらみつけ、そこに刻まれているはずのエッチな動画が脳内に降臨しないかと、しばらく頑張った。が、いくら、にらみつけても、それはただの銀色の板だった。

悔しくてしかたなかったけれど、今日はもう寝ることにした。自分の空想力で、おぎなおうと思った。なにしろ、あのお姉さんが実体化して目の前に現われたんだから、（しかもメイド姿で、）シチュエーションもバリエーションも広がりまくりだった。

ベッドのうえに置いてくれていたパジャマに着替えて、シーツにもぐりこんだ。

僕は空想のなかで、たくさん、みぃこさんと楽しく遊んだ。でも、空想できないシーンにやっぱり到着する。なにしろ脳内の画像データにないのだからしかたない。けれど、きっとそれももうすぐインプットできるはずだ。明日にでもコードを召喚してもらえば。黒いぢゃあくなシリーズから。

終いに僕はものすごくもやもやしてしまった。どのくらいかというと、多分、人類最初の男の人アダムが、神様にまだイブを作ってもらえない頃もやもやしてたくらい、だと思う。こんなとき僕はどうしたらいいのかさっぱりわからなくなる。窓から顔を出して夜風にでもあたろうかな、と思っていたときだった。扉がそっと開いた。

静かに入ってきた人影は、みぃこさんに違いなかった。僕はかぁ

っと頭に血がのぼり、ものすごくどきどきしてしまった。心臓が暴れまわっていたけれど、必死で目を閉じて寝たふりをした。電気をつけないまま、みぃこさんの気配は、そっと枕元に立った。

「眠ってますか？」

優しく問いかけられて、僕は、今目をさましたふりをして、うーん、と言ってみた。

そしてみぃこさんの言った台詞は、まったくもってこれ以上ないほど、冗談ぢゃない、という台詞だった。

「ムカデ使いの大軍が攻めてきました。皆さんもう支度なさってます。マコトさんも支度をなさってください」

ｖｓむかで使い防衛戦、出陣

ムカデ使いがどんな奴かなんて、全然どうでもよかった。知りたくもなかった。けれど、名前を聞いただけで、ほぼ想像がついてしまった。名前に何の意味もない場合って確かにあるけれど、こいつは名前に意味がありすぎだった。

僕はぜったいベッドから出たくなかったから、じっとみぃこさんを見つめてみた。いくら見つめても、みぃこさんは優しい笑顔で僕の無言の訴えを拒絶した。「しかたないですね」と言って、立ち去ってくれることを期待したけれど、優しい笑顔を浮かべたまま、いつまで経ってもそこに立っていた。

僕は涙目でベッドを出て、パジャマのうえに、もらった革ジャンをはおった。

「皆さん、事務所です。急いでくださいね」

時間が止まらないかな、と思った。

事務所に入ると、マイラとナコちゃんがいて、ふたりともパジャマのうえに同じ革ジャンをはおっていた。どうやらこの革ジャンは、悪魔団の子供用ユニホームみたいだった。リュウはさっきと同じスーツ姿だった。

知らない人がひとりいた。ずいぶんキリっとした目をした二十歳くらいのお兄さんで、スワットみたいな恰好をしていた。スワットみたいに黒ずくめの上下で、胴にベスト様のボディアーマー、そしてエルボーパッドとニーパッドを着けていた。ずいぶん恰好よかった。

「自警団のミタ君だ」リュウが紹介して言った。ぜったい暴力団より自警団のほうがいいと思った。

ミタさんは、リュウと少し話をして出て行った。出て行く前、僕のほうを見て、「頑張れよ」とにこっと笑った。そして凛々しい顔に戻り、ゴーグルをはめて出て行った。なんだか、こっちの世界で

はじめてまともな人に会えたような気がして、嬉しかった。入るならぜったい自警団のほうだ、と思った。
リュウはくわえ煙草で、マイラとナコちゃんに言った。
「マコトはまだ悪魔を継承させてない。ふたりで守ってやれ。マコトを保護しながら作戦参加できるな？」
ふたりともうなずいた。
「よし。じゃあ俺は自警団と行動する。マコトを頼む」リュウはそう言って出て行こうとした。
「ちょっとっ、待ってくださいっ」僕は慌てて呼び止めた。僕の護衛が子供ふたりなんて、そんなこと認められなかった。しかも年下じゃないか。でも、言えなかった。マイラがぎろっとこっちをにらんでいた。
「どうした？」リュウが聞いた。
「そ、その……、僕にもアーマーをください。自警団の人みたいな」
リュウはふっと哂った。
「暴力団が鎧を着けてどうする。暴力団がそんな恰好悪いことをしちゃあいけない。じゃあな。頑張れよ」と言って出て行った。
いったい何の哲学なんだっそれはっ、と罵詈雑言あびせたかった。
マイラが冷たい目でこっちを見て言った。
「じゃあ、行くわよ。足手まといにならないでね」
なる自信しかない。役に立てるわけがない。
涙目の僕と、マイラとナコちゃんは、笑顔のみぃこさんに見送られて事務所をあとにした。

外に出ると、自警団の人たちが走り回っていた。みんなタクティカルベストみたいなのを身に着けているけれど、そろいのユニホームというわけではないようだった。ジーンズにパーカーの人もいたし、中にはパジャマのうえにボディアーマーという人もいた。そしてみんなサブマシンガンではなく、剣や槍を手にしていた。
「銃はないの？？」不思議に思ってマイラに聞いてみた。テレビを

持ってこれるくらいだから、銃くらい用意できないとおかしい。
「じゅう??」マイラは聞き返した。
わかんないのか、と思ったら、
「ああ、あんたの世界にあるって奴ね」と言った。そしてまたまた冷たく哂った。
「あんなもの役に立たないわ。異世界人たちは、魔力をおびた剣や槍じゃないと、倒せない」
「ふーん……。あ、お前も僕の世界のこと知ってるの?」
「リュウほど詳しくないわ。それに、お前ってなに??」
「え……??　そ、その、お前歳いくつ??」
「十一よ」
やっぱり年下じゃないか。
「僕は十二だぞ」
「だから、なに??」
ぎろっとにらまれた。なんだかすごみがあった。極道の女みたいだった。その通りで、暴力団の女だった。でもそれ以上な気がした。
「いや……。なんでもない……」
僕たちは真っ暗な商店街を歩いていた。商店はどこも木戸がかたく閉じられていた。自警団の人たちがあわただしく後ろから追い越して行っていた。
「と、ところで、どこに行くの?」
「城門よ。リュウたちが町の外で、一箇所に敵を集めようと頑張ってるわ。だから、そこに行くの」
「ふーん……」敵が一箇所に集まっちゃった場所に行くわけかと、おとなしく自分の運命を心静かに呪った。こっちに来てから、最低最低のほうへどんどん運命が分岐してきたけれど、きっとこれが最後の最低に違いないと思った。多分、僕はそこで死んじゃうに違いなかった。泣きたくなった。なにしろ僕はまだ一回もエッチなことをしてない。

ｖｓむかで使い防衛戦、市街戦

突然、半鐘の音が、ものすごく切羽詰った感じで響き渡った。ナコちゃんが若干慌てた顔をした。ちょっとおびえた様子だった。マイラが不敵な面構えで吐きすてた。

「この鐘は城門が破られた合図よ。入ってくるわ」

そんないやなことは教えてくれなくてけっこうだ、と思った。

「ど、どうすんだよ??」

「中央広場に行くわ。門を破られたら、そこに集めるはずだから」

結局集めちゃうわけだった。で、僕たちはそこへ行かないといけないみたいだった。

こっちに来てから、僕はもう、かなり冷静に自分の運命を悲観的に捉えることに熟練した気でいた。違っていた。まだまだ甘かった。ムカデ使いが使うムカデは、きっと多分、地を蔽うようなムカデの群れだろうと思っていた。それは正解だったけれど、大きさを間違っていた。もちろん、僕の世界にいる奴より、もっと怖くて大きな奴だろう、と想像していた。多分、三十センチくらい、と。全然甘かった。どいつもこいつも二メートル以上あった。夜の闇の中から、ずざざざざ、と恐ろしい音を立て、トリオで登場した。深緑（ふかみどり）と青灰と玉虫色。

「ぎゃっ」僕はからだが凍りつき立ちすくんでしまった。どう頑張っても、足が動かなかった。

周りに大人の姿はない。僕たちだけだった。ムカデが三匹に、僕たちが三人。一瞬三対三の、正々堂々勝負みたいに思えた。すぐに自分の勘違いを笑った。勝負なわけない。ただの一方的な給食の時間。食べられちゃうのは僕たち。が。

無言でマイラがおどりでた。三匹の大ムカデに立ち向かって。手にはいつの間にか、棒術で使うような棒があった。馬鹿だと思った。そんな棒でこんな大ムカデが退治できるわけない、と。

ところが。まるでカンフーの達人みたいに棒を使い、頭をもたげて襲いかかって来るムカデを次々打ちすえた。青灰、深緑、どっちもマイラの棒で打たれると、頭が砕けた。暗闇の中に、長い髪がおどった。玉虫色をうち倒し、最後に身を翻して着地したとき、パジャマの裾がめくれておへそが見えた。

僕は目を点にして見ていた。もちろん、おへそが見えたことなんて、全然どうでもよかった。もっとうえまで見えたとしても、全然興味ない。ティーシャツのときに確認済みだったけど、こいつはどう見てもぺったんこだった。ナコちゃんのほうが、こいつよりももっと細くて背も低いくせに、ちょっとは大きいようだった。でも、それだって微弱な物で、宇宙背景放射と同じで、僕にとっては存在しないも同然のものだった。そんなものを僕はおっぱいとは呼ばない。しかも、おっぱいですらないおへそだったのに、マイラはとんがった目をさらにとんがらせて、僕をにらんで言った。

「どこ見てンの？」

「は……？？」

「今、わたしのおへそ見たでしょ？」

「みっ、みっ、見るかっ」

「うそばっか」

「おっ、おまえのへそなんか、見たって全然嬉しくないよっ」

「ふぅん……。みぃこさんのだったら？」

「へっ？？」

マイラはとてつもなく、邪悪な顔をして、にやっと哂った。それは多分、有史以来、人類で一番邪悪な顔、に思えた。いや、人類の顔、というとまだ甘い気がした。きっと悪魔の顔に近い。

「あんた、みぃこさんをエロい目で見てるもんね……」

「ちょ、ちょ、ちょっと何言ってんだよっ？？　そんなわけないじゃないかっ」

「ふっ、」

とんがった目が不気味に光った。僕は、僕の住む世界ではじめて

悪魔の哂い顔を見た人間、かもしれない、と思った。
「まあ、いいわ。今度ゆっくり話しましょう。今はそれどころじゃないから」恐ろしい顔で哂いながら吐きすてた。
背筋が凍るようだった。ムカデよりもこいつのほうが恐ろしいじゃないか。ごくどうの～、どころか、じごくの～レベル、だった。きっと家系をたどると始祖の名前はサタンとかで、親戚にソラトとか、ベヘモットとか、リヴァイアサンとか、オグだの、アナクだの、マゴグだのいるに違いない。ぜったいゆっくり話したくなかった。
「中央広場に向かうわよ」
マイラはそう言って、背を向けて歩き出した。ナコちゃんがとことこと後を追った。僕は違う意味で泣きそうになりながら、ついて行った。

マイラが駆け出して、ナコちゃんもあとを追った。僕はこんなところでひとりにされるなんてもちろんまっぴらごめんだったから、もちろんあとを追って走った。でも、走った先には、大ムカデが集まっちゃってるんだと思うと、複雑な心境だった。
自警団の人ふたりと合流した。ふたりとも十六・七歳の恰好いいお兄さんで、ひとりはオリーブ色のフリースのキャップに、オリーブ色のプレートキャリアー（胸当て）、グレーのパーカーとジーンズ姿で、足元はスニーカーだった。もうひとりは、デザートカモの迷彩の上下、黒いタクティカルベスト、足元はデルタブーツだった。ふたりとも、ゴーグルをはめていて、手には剣を持っていた。
「この先はムカデだらけだ。俺たちが案内する。こっちだっ」
ずいぶんと恰好よかった。となりの馬鹿高校生とは大違いだった。
ナコちゃんがぺこりと頭をさげて、
「お、おねがいします……」と言って、マイラが、ぴくりとも表情を変えず、
「じゃあ、頼むわね。ソニックさん、カラカラウオさん」と言った。ずいぶんな名前だと思ったけれど、なにも言わないでおいた。

けれどいくらも行かないうちに、闇の中から十匹以上の大ムカデが現われた。こっちもムカデだらけじゃなかっ、と憤慨した。ふたりとも恰好だけで、大嘘つきぢゃないかぅ。語尾が変になりながら涙ぐんだ。

すぐさま、ソニックさんと、カラカラウオさんが、ムカデの群れに斬りこんだ。マイラも棒を躍らせて飛びこんだ。そのときマイラはこう、言い残していた。

「ナコっ。マコトを頼むわよ」

はあっ??　と思った。ナコちゃんに任せるなんてどうかしてるっ、と。もちろん、「マコト、ナコを頼むわよ」と言われたって、僕にはどうにもできないけど。

案の定、何かがこっちにやって来た。それは、横の建物の影から出てきた。ムカデじゃないけど、自警団の人でもなかった。全身真っ黒の毛むくじゃらで、目が光っていた。誰っ、て、教えてくれなくてもこいつがムカデ使いに違いなかった。僕とナコちゃんをにらみすえて哂って剣をかざしたけど、マイラもお兄さんたちも気づいてなかった。

ナコちゃんがおろおろしながら、左手を前に突き出した。印を結んでいた。

「アイヌグゥム、レグィマムフス」

ナコちゃんが変な呪文を唱えると、ナコちゃんの前に大きな鳥が現われた。ハゲタカくらいの大きさ。真っ黒けで頭が禿げてて、一瞬ハゲタカかなっって思ったけど、ハゲタカとは違っていた。コウノトリに似ていた。ナコちゃんは、あたふたしながら、もう一度呪文を唱えた。

「クルルゥス」

鳥がぶわっと翼を広げた。その瞬間、ムカデ使いの周囲の空間に、突然八本の剣が出現して、八方からムカデ使いのからだを串刺しにした。もちろん、スプラッター映画の効果音みたいな派手な音を立てて。血が飛び散った。ムカデ使いは、ぐちゃぐちゃのスプラッタ

ーな姿になって、転がった。
僕は気が遠くなった気がした。けれどそれはナコちゃんも同じみたいだった。血を見て立ちくらみがしたみたいで、ふらふらっとした。でも、もう一度左手で印を結ぶと呪文を唱えた。
「アイヒズロー、マムフス」
鳥が消えて、ムカデ使いのからだに、ぐさぐさに突き刺さっていた剣も消えた。ぐちゃぐちゃの無残な死体が転がっていた。
「いっ、いっ、今のなに??」
今のがナコちゃんの継承した悪魔に違いないと思った。
「い、い、今のはマムフスです……」おろおろしながら答えた。
「まっ、まっマムフスって??」
「ま、マデラ二十四霊の一霊で、異世界の霊です……」
「れっ、霊って、普通の鳥みたいだったけどっ。霊みたいには見えなかったよっ」
霊って、半分透き通ってたりすると思うんだけど、今のは普通の生き物みたいだった。
「なっ、なんだか、そうなっちゃうんです。実体化すると……」
「ぼっぼっ、僕のもあるのっ??」
あるからこっちに呼ばれたんだった。
「は、はい。リュウさんがくれると、思います……」
「ほっ、ほっ、ほんとにっ??」
「は、はい……」
なんて恰好いいんだっ。僕は感激した。けど、すぐにひとつのことに気づいた。
「ひょっとして、マイラも持ってるの??」ひょっとしてじゃなくて、まさかでもなくて、持っているはずだった。
ナコちゃんは、うなずいた。
あんな邪悪なクソ女に、こんな危険なものを持たせるなんて、どうかしてるっ。
憤慨した僕は、あいつが菜の花畑で言ったセリフを思い出した。

「召喚しちゃうわよ」。
一回殺されかけてるぢゃないかっ。

ｖｓむかで使い防衛戦、殲滅

ソニックさんと、カラカラウオさんの先導で、ずっと狭い路地を抜けていった。建物の隙間から、高い石造りの壁が見えていた。なんだろう？　と、ずっと気になっていた。

近づいてみると、まるで球場のようだった。屋根はないけど、円形の石の壁がずっと向こうのほうまで、ぐるっと続いていた。僕たちが来た道は、その石の壁の門をくぐって内側へと続いていた。野球場の入場ゲートに似ていた。同じような門がいくつもあり、町中の道がそこでつながっているようだった。

僕は山のうえから見た町の光景を思い出した。中心になにもない円形の広場があり、そこから放射状に道がのびていた。きっとここだと思った。そしてここが、中央公園だった。

門をくぐりながら見ると、となりの門の中へムカデを誘いこんでいる自警団の人たちがいた。

中は殺風景だった。コロシアム風でもない。がらんどうで、ただ高い石の壁だけ。それがぐるりと円形に広場を囲んでいた。なぜか知らないけど、壁には焼け焦げたあとがある。四方八方に門があった。

公園のくせにベンチも遊具も木々もない。もしあったとしても、きっと埋めつくされたムカデで見えなかっただろうけど。

真ん中あたりにむかで使いが何人もいて、奇妙な感じに手をかざしていた。うじゃうじゃいるムカデを操っているみたいだった。ムカデは、これでもかっ、ていうくらいうじゃうじゃいた。深緑に、青灰に、玉虫色。蠢いていた。そして自警団の人たちが、真ん中のほうへ追い立てていた。その中に、リュウとミタさんもいた。

リュウは、くわえ煙草で刀をふり回していた。他のみんながローブレみたいな剣（まっすぐな両刃の剣）なのに、リュウのは、日本刀みたいな片刃の刀だった。黒いスーツ姿でそんなものふり回して

いると、やっぱり暴力団にしか見えなかった。僕らに気づくと、にやっと笑った。
「よう。やっと来たな」
それからミタさんに言った。
「よし、合図だ」
ミタさんがうなずいて大きな声で言った。
「閉門っ。ゲート閉じろぉ」
自警団の人たちが一斉に動いた。駆けだした。僕たちを案内してきたソニックさんとカラカラウオさんも、走って行って僕らが入ってきた門を閉ざした。鉄の檻でふさがれた。
目を丸くしている僕に、リュウが笑って説明した。
「逃げ道を断つんだ」
僕の逃げ道を断っているのか、と思った。
みんな帽子をかぶりなおし、目出し帽の人は顔を隠した。ゴーグルやサングラスをかけた。リュウはタオルを頭に巻いて、ゴーグルをつけた。いつの間にか、マイラとナコちゃんもタオルを頭に巻いてゴーグルをつけていた。
何をしてるんだ??　と、当然思った。
「さがってろよ」リュウがきょとんとしてる僕に言った。
マイラが前へ出た。襲いかかるムカデたちを、ミタさんやカラカラウオさんたちが退けた。そのなかでマイラは、左手で印を結び、呪文を言った。
「アイヌグゥム、レグィウラゥズ」
マイラの前に、大きな黒豹が現われた。赤い目で、牙をむいていて、めちゃくちゃ格好よかった。マイラはもう一度呪文を言った。
「ギガクルゥラス」
きぃぃん、だか、ひゅぅぅん、だか、ミサイルがどんな音で飛んでくるのか知らないけれど、そんな音をひきずって、ミサイルみたいに空から落ちてきたのは、馬鹿でっかい火球だった。火の玉というよりも光の玉。社会化見学で見たガラス工房の炉の中より明るい

色だった。それが空の上のほうから落ちてきた。
広場中央に着弾すると、紅蓮の焔がまきあがり、ぶわっとふくらんだ。次の瞬間、顔に熱い風がかかり、一瞬で目の中の水分が飛び、前髪はちりちりになった。なぜみんなが帽子をかぶったりタオルを巻いたりしたのかわかった。教えてくれよ、と思った。ふくらんだ爆発はムカデたちをのみこみ、それから収縮して、広場中央で巨大な火柱になった。逆巻く焔の竜巻。焔の色は紅蓮からふたたび眩い白へと変化した。目のくらむような光の中を、巻き上げられたムカデたちの黒い影が、渦巻いていた。まるで巨神兵に焼きはらわれる大きなあの蟲みたいだった。自警団の人たちが、爆発を逃れたムカデを、火の中へ追い立てていた。そして僕は目がまったく見えなくなった。どうしてみんながゴーグルをつけていたのかわかった。教えてくれよ、と思った。目を閉じても、真っ白けのままだった。ごごご、という焔の音がずっと聞こえていた。音が小さくなり、広場に肉の焼け焦げた臭いがたちこめた。知らないおじさんの声が聞こえた。
「ふぅ。やれやれ。やっと終わった。腹が減ったな……」

翌日、みんなでムカデの死体を片づけた。僕は大人の男の人に混じって、台車で黒焦げのムカデの死体を運んだ。リュウと一緒に運んだ。
ミタさんや、ソニックさんや、カラカラウオさんもいて、みんな僕を見るとにっこり笑った。「来てそうそう大変だったな」とか、「がんばれよ」とか、言ってくれた。
マイラやナコちゃんも手伝っていたけれど、リュウは僕に言った。
「これは男の仕事だな」
僕はみんなに一人前みたいに扱われて少し嬉しかった。

運んだムカデの死体は、町の外の大きな穴に埋めた。
僕はちょっとほっとした。なにしろ、ウシガエルやブタガエルを食べちゃう人たちだ。（ウシガエルやブタガエルがどんな奴か知らないけれど）。ひょっとしたらムカデくらい食べるんじゃないかと思ってた。肉の臭いをかいで、腹が減ったな、と言ったおじさんもいたし。
僕が自分の勘違いを笑いながら言うと、リュウはおもしろそうに笑った。
「馬鹿だな。こんなもの食うわけないじゃないか」
「そりゃそうだよね」
「当たり前だ。さあ。これがすんだら次はムカデ使いの死体を片づけるぞ」
「あ、うん」
「そっちは食料倉庫のほうへ運ぶ」
「え??」
「ムカデはまずくて食えんが、ムカデ使いのほうは別だ。美味いからな」
僕が涙ぐむと、にやにや哂いながら言った。
「ふっ。ほんとにおもしろいガキだ。食うわけねぇじゃねえか。気持ち悪い」
ほんとにどこまでも最低な大人だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6492g/

悪魔憑き少年少女暴力団

2010年10月10日03時42分発行